

された。

### 11. 肝癌患者に対する LAK 細胞の経肝動脈注入療法

小松 達司 (消化器病センター内科)

既存の治療法の適応のない原発性肝癌(HCC) 8例, 転移性肝癌 4例に対して, 経肝動脈的に LAK 細胞と Interleukin 2 の注入療法を行った。HCC 8例中 3例で minor change 以上の腫瘍の縮小を, また 6例で血清 AFP 値の低下を認めた。一方, 転移性肝癌 4例中 1例が minor change であり, 他の 2例では腫瘍の増大を抑制でき 1年以上の生存が得られた。本療法は重篤な副作用はほとんど認められず, 全身状態不良の患者に対しても投与可能である。しかし, その効果は永続的なものではなく, 手術後の補助療法や, TAE など他の治療法との併用が必要ではないかと考えられる。

### 12. 重症肝炎における超音波検査法の意義

黒川 香 (消化器病センター内科)

目的: 急性肝障害時の超音波検査で, 重症度, 予後, 病態把握を試みた。

方法: 昭和57年から62年までに, 当センターに入院し病理組織所見の得られた定型的急性肝炎13例 (A型肝炎 4例, B型肝炎 7例, 非 A 非 B型肝炎 2例), 劇症肝炎 (急性型 5例, 亜急性型 4例; 生存例 2例, 死亡例 1例) につき, 肝の大きさ, 肝腎コントラスト, 静脈, 門脈, 胆のう, 脾臓等の所見および, 超音波 Doppler 法により肝血流の経時的変化を検討した。

結果: 急性肝炎と劇症肝炎, 劇症肝炎の生存例と死亡例, には経過に大きな差が認められ, 肝血流の経時的変化を見た。

超音波検査法により急性肝障害の経過を観察することは重症度, 予後の判定に有用であり, さらに血流の経時的変化の計測を付加することにより病態の把握に役立つと考える。

### 13. 頸部食道異所性胃粘膜の 2 症例

貞永 嘉久 (貞永胃腸科クリニック)

Pentagastrin の刺激後, Congo red を撒布することにより, case 1 の区域は黒色に染り他方 case 2 は変色しなかった。内視鏡検査にて case 1 はベルベット様の赤色, 卵円形の区域が切歯列より 18~20cm の左側にあり, case 2 では黄褐色帯が歯槽縁より 16~20cm の右後側に不規則な長方形として位置する。Methylene blue, Toluidine blue, ヨード染色を施行したが, これらの色素では不染であった。

生検材料ミクロでは壁細胞, 主細胞が多くある胃底

腺粘膜であり, 腸上皮化生はみられなかった。我々は 1804年の Schmidt から 1987年 12月までの文献を広くに探索した。EGPE から発生した上部食道原発性腺癌は 9症例 (7報告) しかみられない, EGPE の区域があまりにも小さくまた腫瘍の発育により破壊されるため, 報告されない多くの症例があるだろうが, EGPE の腸上皮化生はいくつかの反論があるとしても癌の発生源地として重要である。

Christensen, W. N., Danoff, B., Schmid, H. らはそれぞれ EGPE より発生した上部食道腺癌の発表で EGPE の腸上皮化生について報告している。近年, EGPE に関する研究が immunoassay 等多くある。我々は, EGPE の炎症 (食道炎を含めて) が予測される dysplasia への重要な変質の一つと推定する。

14. 胸部食道癌に対する拡大郭清の有効性について。特にステージ III, IV 症例の予後と再発形式の検討

吉田 操, 岩塚 迪夫, 室井 正彦  
(都立駒込病院外科)

従来術式による根治切除 106例, リンパ節拡大郭清による根治切除 34例の 1 生率, 2 生率をステージ III, IV 症例を対象に比較し, 拡大郭清術式の有効性を検討した。ステージ III は従来術式 (39例), 拡大郭清 (5例) であり, 1 生率 (従来術式 71%, 拡大術式 80%) と差はない。しかし 2 生率では (従来 44%, 拡大 80%) と明らかに拡大術式が良好な結果であった。ステージ IV では, 1 生率 (従来 58%, 拡大 80%), 2 生率 (従来 19%, 拡大 70%) であり, 1 生, 2 生共に危険率 5% 以下で有意差があった。拡大郭清術式の手術直死率 6%, 入院死亡 6% は侵襲の大きな割に良好な結果であった。しかし, 両側反回神経麻痺は 33% に生じ, 9 割は一過性であった。また, 気管気管支の虚血性変化は 4 例に生じ, いずれも救命し得たが, 今後術式の工夫を要するものと考えられた。

### 15. 早期の食道 oat cell carcinoma の 1 例

京野 昭二, 高井 惇, 谷口 善郎  
田久保海馨, 田尻 孝, 笹島 耕二  
山下 精彦, 恩田 昌彦

(日本医科大学第 1 外科)

症例は 75 歳, 男性。昭和 60 年 1 月, 特に自覚症状はなかったが消化管検査にて食道の異常を指摘され入院す。食道造影, 内視鏡にて Im に約 3.0cm にわたる大小不同の顆粒状小隆起を認め, 扁平上皮癌が証明された。手術は, 右開胸にて胸部食道全摘術を行った。肉眼的